燃料

あると

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
燃料

【Ｎコード】
Ｎ４７４３Ｔ

【作者名】
あると

【あらすじ】
「お酒は私の燃料なの」
彼女の口癖だった。

「お酒は私の燃料なの」

昼間からビールのグラスを傾けて、彼女は言う。

「ご飯もちゃんと食べなよ。酒ばかりじゃ体に悪い」

烏龍茶を飲む彼は、彼女の作った料理を口にした。休日はいつも、朝と昼を合わせたブランチだ。

「ツマミだけでいい」

豆腐とトマトのサラダを食べながら、彼女は自画自賛していた。

「そりゃ、うまいけどさ」

彼女の料理は本当にうまかった。鶏肉とわかめの蒸し物、鱈のタルタルソースがけ、定番の肉じゃがなど、レパートリーが豊富で、いつも新しいメニューが作り出されている。友達が来ると必ず振る舞い、評判も上々だった。

「休肝日も必要だって」

「二十四時間休めばいいんでしょ？　昨日の昼が最後だったから、問題ないじゃない」

にやにや顔の彼女に言葉を失った。屁理屈に勝てる気がしなかった。

「燃料がなくなったら、死んじゃうしね」

「絶対、肝臓壊すな、お前」

それから五十年、彼女は布団の上で最後を迎えようとしていた。

「ねえ、最後に一杯付き合ってよ」

「俺が下戸(げこ)なの知っているだろ」

皺のある手が膝を叩いた。

「わかったよ。待ってろ」

ショットグラスを二つ持ってきて、モルトを注いだ。彼は酒を飲まなかったが、グラスの類は必ずペアで揃えていた。いつも、ひとつは酒で、ひとつはソフトドリンクだった。

「乾杯」

「乾杯」

彼女は笑みを残して、数時間後に逝った。

「満足そうな顔しやがって」

彼はグラスをひと舐めした。

「俺の燃料もなくなっちまったか」

彼は、彼女の頬を撫でて寄り添った。

そして、眠気を感じて、目蓋を閉じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4743t/

燃料

2011年10月8日01時52分発行